

特別企画展

しちや

じょせい

# 質屋と女性

いちよう

かよ

いせや

しちてん

## 一葉も通った伊勢屋質店

明治期と昭和初期の  
女性の暮らしや質屋  
利用を分析した  
パネル展

\* 申込不要  
\* 詳細裏面

一葉忌11/23限定  
トークセッション  
『女性職業作家誕生』

\* 要事前申込  
\* 詳細裏面

小学生向け  
ワークショップ  
『質屋ごっこ』

\* 要事前申込  
\* 詳細裏面

入場無料

各日先着20名に  
オリジナル缶バッ  
ジをプレゼント!

2024（令和6）年

11月16・23・30日（土）

12月7・14日（土）

開館 12時～16時（最終入場は15時30分）

菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）

東京都文京区本郷5-9-4

〔主催〕跡見学園女子大学地域交流センター

〔企画〕跡見「学芸員」in菊坂 



伊勢屋質店は、万延元年（1860）に創業し、昭和57年（1982）まで約120年にわたり営業していた質屋です。私たち跡見「学芸員」in菊坂は、この旧伊勢屋質店を活動拠点として、これらの文化財を活用して調査研究を行っています。

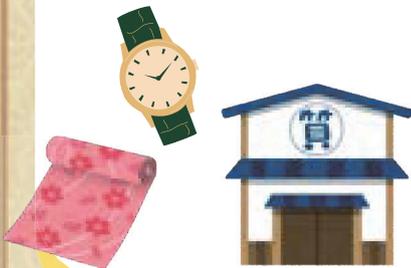
今回の企画展では、約120年にわたる伊勢屋質店の歴史のなかで、明治期および昭和初期の女性の質屋利用者の状況を分析した成果を紹介します。明治期については伊勢屋質店に通った樋口一葉の日記、昭和初期については昨年度から跡見「学芸員」in菊坂メンバーで翻刻を行っている柳町支店の質物台帳（昭和12年～13年）を分析しました。時代は異なりますが、これらの記録からは当時の女性たちの暮らしや質屋の利用状況の一端を読み解くことができます。子どもたちにも楽しんでもらえるように、子ども向けの表現でパネルを作りました。

子どもから大人まで、どなたでもご来場いただけます。ぜひお気軽にお越しください！

### 小学生ワークショップ

## 『質屋ごっこ』

- ・開催日時：各開催日11：00～12：00
- ・受付：10：50～
- ・対象：小学生
- ・募集人数：各日10名
- ・参加費：無料
- ・申込方法：事前申込制・先着順  
下記QRよりお申込みください。
- ・申込締切：各開催日3日前まで



申込フォーム



### トークセッション

## 『女性職業作家誕生 - なぜ樋口一葉は日本初の女性職業作家になれたのか』

- ・ゲスト：伊藤氏貴先生（明治大学文学部教授、著書『樋口一葉赤貧日記』ほか）
- ・開催日時：2024年11月23日（土・祝）  
16：00～17：00
- ・受付：15：50～
- ・対象：小学生から大人まで
- ・参加費：無料
- ・申込方法：事前申込制・先着順  
下記QRよりお申込みください。
- ・申込締切：11月16日（土）まで



申込フォーム



\*跡見「学芸員」in菊坂は、跡見学園女子大学の学生たちで結成したグループです。旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）を拠点として活動しています。



【会場】菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）  
東京都文京区本郷5-9-4



【アクセス】※駐車場はありません。公共交通機関でご来場ください。  
\*都営大江戸線・三田線「春日駅」より徒歩約5分  
\*東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目駅」より徒歩約7分  
\*B-ぐるバス⑦「文京小石川クリニック（三田線春日駅）」より徒歩約5分  
【問い合わせ】跡見学園女子大学地域交流センター d-chiiki@mmc.atomi.ac.jp



# しちや 質屋って何？

## 質屋はどんな場所？ → 庶民の身近な金融機関

質屋とは、お客さんから品物を預かり、その品物に見合う金額のお金を貸す場所（金融機関）です。今でこそ身近な金融機関は銀行ですが、昔は裕福な人たちが銀行を利用していませんでした。そのため、生活に困った人たちが代わりに利用するのが質屋でした。

質屋が増え始めたのは、江戸時代です。第8代将軍徳川吉宗は、人々に質素倹約（節約して暮らすこと）を進めました。すると人々が物を買わなくなったため、不況になってしまい、生活に困った人にお金を貸す質屋が急速に増えたとされています。

さらに明治期から昭和初期にかけて、質屋を利用する人が増えました。東京で質屋の数が一番多かったのは昭和初期で、1918年に約1300店ありました。この時代は、戦争による不況で貧しい人が増え、生活のためにお金を借りに行くことが多くなったと考えられています。

1920年代に行われた都市の庶民金融に関する調査の中では、「庶民階級に拓かれたる唯一の救済所といふても過言ではない（庶民にとって唯一の助けの場所だといっても過言ではない）」と説明されているように、庶民にとって大切な場所でした。

### 質屋（しちや）

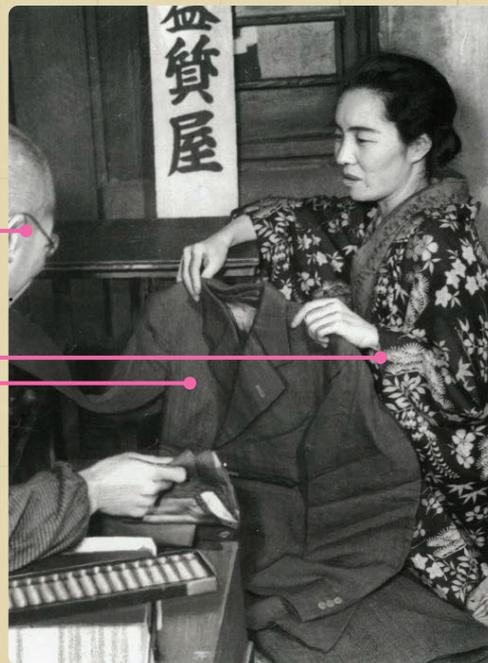
品物がいくらぐらいの価値があるかを見分ける知識が必要だった。

### 客（きやく）

少しでも多くのお金を借りるために、質屋の主人に交渉することもあった。その結果、借りられるお金が少し増えることもあった。

### 質草（しちくさ）

第二次世界大戦後には、オーダーメイドのスーツなどの人気が高く、質屋にも多く持ち込まれた。



## 質屋の仕組み

質屋はこのような仕組みで成り立っています。



## 質屋の隠語

質屋でお金を借りることは、一般的に後ろめたいこととされていたことから、他の人には分かりにくいように隠語で呼ばれていたこともあり、

### 使われていた隠語

**16銀行**  
「1+6=7」で「質」と表して、「銀行」と呼びました。  
**七ツ屋**  
「質」という漢字が難しいことから「七」で表記されていました。

## 利子

質屋からお金を借りるときの追加料金。利子は、質屋にとって大事な収入です。

参考文献

- ・小泉和子【監修】、2020、「昔のお仕事大図鑑」株式会社日本図書センター
- ・杉山伸也、2014、「戦前東京における質屋業の統計的解析」社会経済史学会
- ・澤宮俊、平野恵理子、2021、「いま思い出す懐かしいのレトロ」量販、駄菓子屋、豆腐屋…イラストで見る「昭和の消えた職業」10選」株式会社文藝春秋、[URL] <https://bunshun.jp/articles/-/45201?page=6> (8月26日閲覧)
- ・種村季弘、1992、「日本の名産別巻18 質屋」株式会社作品社

# いせやしちてん 伊勢屋質店とは？

## いせやしちてん 伊勢屋質店とは

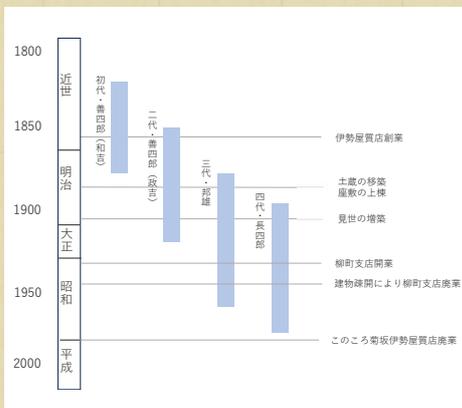
伊勢屋質店とは文京区本郷菊坂で江戸時代から130年あまり営業していた歴史ある質屋です。万延元年(1860)に質屋として開業し、昭和59年(1984)に廃業しました。昭和7年(1932)には柳町に支店が開業しましたが、戦時中に空襲被害を軽減するために建物を取り壊した「建物疎開」の影響で閉業し、今は菊坂の建物のみが残されています。



まきさか いせやしちてん  
菊坂の伊勢屋質店

## いせやしちてん けいえい 伊勢屋質店を経営して いた永瀬家の人物たち

伊勢屋質店は永瀬家4代に渡って営業されました。右の図では、それぞれの人物の名前と、その時代の主な出来事についてまとめています。



## とうじ しょうにん 当時の使用人

ばんどう めい てつだ  
番頭2名 お手伝いさん1~2名

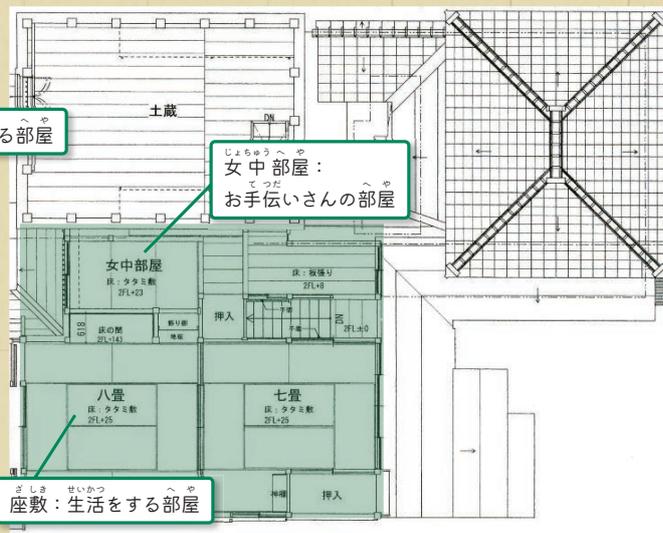
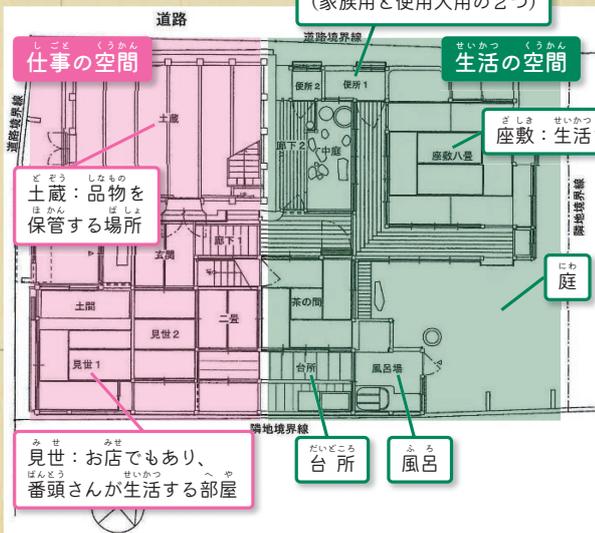


しょうにん ぜんいん す こ はたら  
使用人は全員住み込みで働いていました。

## たてもの 建物について

伊勢屋質店の建物は永瀬家によって残され、何度も修理を繰り返しながら今は見世(店舗兼住宅)、土蔵(倉庫)、座敷(住居)が残されています。平成28年3月には建造物と棟札(見世)が文京区指定有形文化財に指定されました。一般公開されていない2階には3つの部屋があり、2部屋は座敷(和室)として、小さな1部屋は女中部屋として使用されていました。

トイレ：  
かぞくよう しょうにんよう  
(家族用と使用人用の2つ)



参考文献  
・跡見学園女子大学、「旧伊勢屋質店(菊坂跡見堂)」跡見学園女子大学HP (2024年10月21日取得、<https://www.atomi.ac.jp/univ/about/campus/iseya/>)  
・金子祥之、2020年、「伊勢屋質店の生活史-暮らしから建物の保存まで-」『ゆかり(跡見学園女子大地域交流センター年次報告書)』跡見学園女子大地域交流センター



# しちい ひん しょうかい きものへん 質入れ品の紹介 (着物編)

だいちょう しちい いちれい み  
台帳から質入れの一例を見てみよう！



品名	数量	単価	合計	備考
黒梅(の意)	1	25	25	
黒袖茶(の裕羽折)	1	25	25	
仙台平紺茶小棒縞(の单袴)	1	25	25	
名仙紺茶立縞(の男袷)	1	25	25	
黒メルトン(の意)	1	25	25	
木島黒地茶白小縞(の男袷)	1	25	25	
黒七之子丸羽花菱五ヶ所振付紋付(の裕羽折)	1	25	25	
紋金紗淡藤単地友仙秋草口カゴ流中形(の女单物)	1	25	25	

- 黒梅(の意)
- 黒袖茶(の裕羽折)
- 仙台平紺茶小棒縞(の单袴)
- 名仙紺茶立縞(の男袷)
- 黒メルトン(の意)
- 木島黒地茶白小縞(の男袷)
- 黒七之子丸羽花菱五ヶ所振付紋付(の裕羽折)
- 紋金紗淡藤単地友仙秋草口カゴ流中形(の女单物)

しょうわ ねん がつ にち  
昭和 12 年 12 月 16 日

どうしよう、年越しするのに  
お金が足りないわ。着物を質  
入れしてお金をかりなきゃ！

着物類 7 点ですね。25 円お貸  
しします。流質するのは 4 か  
月後です。利子は 31%なので、  
7 円 75 銭です。

32日後

わ可さん  
伊勢屋質店

着物類 7 点を質入れ  
25 円を借りる  
25 円+当時の航空運賃(東京-大阪間)

しょうわ ねん がつ にち  
昭和 13 年 1 月 17 日

利子も入れて、32 円  
75 銭を返せるわ！

確かに、32 円 75 銭いた  
だきました。質入れ品を  
お返しします。  
ありがとうございました。

32円75銭を返す  
着物類 7 点を取り戻す

わ可さん  
伊勢屋質店

## どんな着物が質入れされたの？

だんじょ しちい じよせい あふく きもの しょうかい  
男女ともによく質入れしていた女性の和服 = 着物を紹介します。

### 単物(たんもの)

裏を付けずに仕立てた和服類の総称のことで、涼しさを感じられるように作られています。主に初夏や初秋など暑すぎず寒すぎない季節に着用されます。「単衣」とも呼ばれます。



### 羽織(はおり)

着物の上に羽織る、ジャケットやコートのような役割を果たす和装の上着です。



### 袷(あわせ)

裏地が付いている二重仕立ての着物のことで保温性が高いのが特徴です。主に涼しい季節に着用され、秋や冬、春に適しています。



### 小袖(こそで)

現在の和服のもととなった、袖口の小さく縫いつまっている着物のことを言います。



参考文献

- 金沢市、2023、「羽織(銘仙)」、金沢ミュージアム+ (2024年10月31日取得、<https://kanazawa-mplus.jp/collection/page-minzoku336.html>).
- 国立文化財機構、「浴 宮縮縮地帯木に雲雀文様刺繍」、国立文化財機構所蔵品総合検索システム ColBase (2024年10月31日取得、[https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/kyohaku1%3E7%94%BE570-13?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/kyohaku1%3E7%94%BE570-13?locale=ja)).
- 国立文化財機構、「小袖 白練地秋雲様」、国立文化財機構所蔵品総合検索システム ColBase (2024年10月31日取得、[https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/tm1-721?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tm1-721?locale=ja)).
- 東京都歴史文化財団、「単衣」、Tokyo Museum Collection (2024年10月31日取得、<https://museumcollection.tokyo/works/6284839/>).
- 長崎観、2005、「きものど製のことば案内」小学館。
- 永津昌枝監修、2014、「着物用語事典」百日堂。



# しちや りょう めいじ じょせい ひぐちいちよう 質屋を利用した明治の女性 -樋口一葉-



明治時代に質屋を利用した女性として知られるのが、女流作家の樋口一葉です。ここでは略年譜で一葉の人生について紹介します。

年代	出来事	作品
明治5年(1872) 0歳	3月 東京府第二大区一小区(現千代田区)内幸町で生まれる(本名は奈津)	 <p>左に、一葉 神田区新町(現墨田区)撮影/樋口家蔵</p>
明治10年(1877) 5歳	3月 公立本郷小学校に入学するも幼く月末に退学 9月 私立吉川学校に入学	
明治14年(1881) 9歳	4月 吉川学校を退学 11月 私立青海学校に入学	
明治16年(1883) 11歳	12月 青海学校高等科第4級を首席で卒業	
明治19年(1886) 14歳	8月 中島歌子の歌塾・萩の舎に入学	
明治20年(1887) 15歳	12月 兄の泉太郎が肺結核のため23歳で死去	
明治21年(1888) 16歳	2月 兄の泉太郎に代わり家督相続、戸主となる	
明治22年(1889) 17歳	5月 渋谷三郎と婚約 7月 父の則義が病のため58歳で死去 9月 渋谷三郎に婚約破棄される	
明治23年(1890) 18歳	3月 初めて小説の断片を書く 9月 母・妹と本郷区(現文京区)菊坂町に引っ越す	
明治24年(1891) 19歳	3月 小説家になることを決心する 4月 半井桃水に小説の書き方を教わる 秋頃 ペンネーム「一葉」を使い始める	
明治25年(1892) 20歳		3月 第一作「闇桜」が雑誌『武蔵野』に載る 4月 「たま裡」が雑誌『武蔵野』、『別れ霜』が『改進黨』に載る 7月 「五月雨」が雑誌『武蔵野』に載る 10月 「経つくえ」が『甲陽新報』に載る 11月、12月 「うもれ木」が雑誌『都の花』に載る
明治26年(1893) 21歳	7月 下谷区(現台東区)龍泉寺町に引っ越し、雑貨・駄菓子 <small>を</small> を売る店を始める	2月 「暁月夜」が雑誌『都の花』に載る 3月 「雪の日」が雑誌『文学界』に載る 12月 「琴の音」が雑誌『文学界』に載る
明治27年(1894) 22歳	5月 店を辞めて本郷区(現文京区)丸山福山町に引っ越す 9月 和歌と古典文学を家で教える	2月、4月 「花ごもり」が雑誌『文学界』に載る 7月、9月、11月 「暗夜」が雑誌『文学界』に載る 12月 「大つごもり」が雑誌『文学界』に載る
明治28年(1895) 23歳	龍泉寺で暮らす人々に影響を受け短期間で、多くの小説を書きました。一葉の小説は森鷗外からも絶賛しました。	1~12月 「たけくらべ」の1~14章が雑誌『文学界』に載る 4月 「軒もる月」が『毎日新聞』に載る 5月 「ゆく雲」が雑誌『太陽』に載る 8月 「うつせみ」が『読売新聞』に載る 9月 「にごりえ」が雑誌『文芸倶楽部』に載る 12月 「十三夜」が雑誌『文芸倶楽部』に載る
明治29年(1896) 24歳	11月23日 肺結核のため死去	1月 「この子」が雑誌『日本乃家庭』、『わかれ道』が雑誌『国民之友』、『たけくらべ』の十五~十六章が雑誌『文学界』に載る 2月 「裏葉」の上(未完)が雑誌『新文理』に載る 5月 「わかれから」が雑誌『文芸倶楽部』に載る

兄と父が亡くなり一葉が樋口家を支える立場に…。その後菊坂へと引っ越し、父の仕事の借金も抱えながら母と妹を養わなければいけない一葉は、お金のために小説を書くことを決めました。しかし当時の女性の職業は限られており、小説でお金を得ることは難しく、そう上手くはいきませんでした。

一葉が小説家として活躍したのはわずか4年。今後を期待されていた矢先に24歳で亡くなりました。

奇跡の14か月

## 一葉と伊勢屋質店

一葉は明治23年9月から明治26年7月までの3年間、菊坂の借家に暮らしていました。菊坂で一葉が小説家を目指している時に、苦しい生活を支えるため利用していたのが伊勢屋質店なのです。一葉は龍泉寺に引っ越してから伊勢屋質店に通い続けています。また一葉が亡くなったとき伊勢屋質店の主人は香典を送っており、これらのことから一葉と伊勢屋質店は強いつながりがあったとわかります。



参考文献  
 ・伊藤氏賞、2022年、「樋口一葉赤黄日記」中央公論新社  
 ・川口昌男、1998年、「樋口一葉の手紙」大修館書店  
 ・台東区立一葉記念館編、2023年、「台東区立一葉記念館図録」

# 樋口一葉の日記を見よう①

樋口一葉は、16歳のときから亡くなるまでの約10年間にわたって日記を書いています。この日記から、一葉が質屋をどのように利用していたのか読み解きます。

## 質屋に対する反応

明治25年8月28日、一葉は、妹・邦子と母・たきに質入れを提案していますが、8月30日の日記から、母は質屋を訪れることに反対していたようです。しかし、その後一葉たち家族は伊勢屋質店に長く通うことになるのです。

明治25年8月28日

「私の小説はまだ完成せず、一銭の収入のあてもない。…(母に)私と邦子の着物をある限り質入れて急場をのがれようなどと話す。…」

原文「我が著作いまだ成らず一銭を得るの目あてあらず、…おのれ国子ある限りの衣類質入れて一時の急をまぬかれはやといふ、…」

明治25年8月30日

「母はしきりに質入れのことはよくないといって、…」

原文「母君しきりに質入れのことを可ならずとして、…」

## 伊勢屋質店に訪れた日

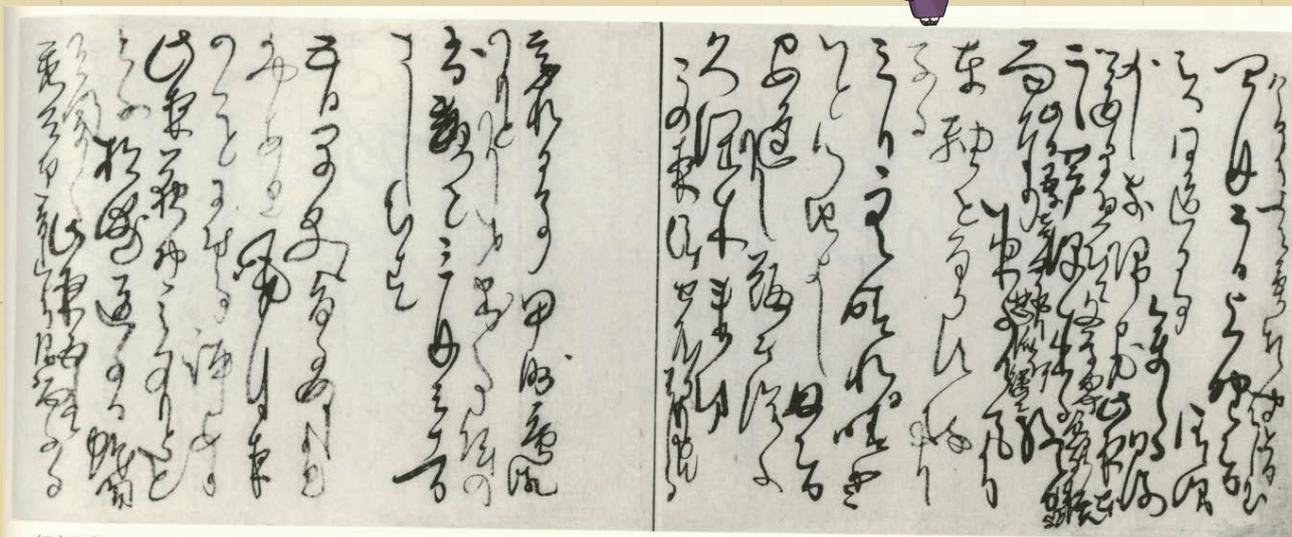
明治26年4月3日に初めて伊勢屋を訪れました。「伊せ屋かもとにはしる」という記述は、この日以外にも日記に何度も記されており、貧しく、生活に困っていた一葉たち家族にとって重要な場であったことが分かります。

明治26年4月3日

「空はすっかり晴れて気持ちがいい。…夜、質屋の伊せ屋に走る。」

原文「空暗れに暗れていと心地よし、…この夜伊せ屋かもとにはしる」

## 一葉直筆の日記 (明治26年4月1日～5日)



# 樋口一葉の日記を見てみよう②

## 日記に書かれた一葉の質草

一葉はどのようなものを質入れしていたのでしょうか。一番多かったのは、**着物**だったようです。

現文京区菊坂町に住んでいた時

借りた金額の記録はありませんが、着物の貸出額は、30 銭から 50 銭が最も多かったことから、一葉がこの日、借りられたのは高く計算して 3 円ほどであったと考えられます。

明治 26 年 5 月 2 日

「今月も質屋の**伊勢屋**に走らねば手元(お金)がたりない。  
小袖の**着物四枚**、**羽織二枚**を**風呂敷一枚**に包んで母と私とで持って行く。」

原文「此月も伊せ屋かもとにはしらねば事たりず、  
小袖四つ羽織二つ風呂敷につゝミテ、母君と我と持ゆかんとす、…」



着物を預けたお金で  
白米を買っていたとしたら？

お金を借りる  
約 3 円

明治 25 年 東京における白米 10 kg 当たりの価格 = 67 銭  
3 円で買える米の量は… 約 45 kg

明治 28 (1895) 年に定められた質屋取締法を参考にする、1 ヶ月 1 円以上 5 円以下の場合、利子は 3% でした。3 円借りた場合の利子は 9 銭となります。受戻しのためには、一葉は 1 ヶ月後、3 円に 9 銭を足して返す必要がありました。しかし、翌 5 月 3 日にも一葉の母が伊勢屋質店を利用していることから、この日に預けた着物は質流れになったかもしれません。

現台東区龍泉寺町に住んでいた時

菊坂から引っ越した後も伊勢屋を利用していたことが分かります。また、明治 27 年 2 月 2 日には、よそ行き**の着物が 1 枚もなかった**という記述があります。日常的に着る**着物はあった**と思いますが、「**着物は全部**」と表現するほど**着物が少なく**、**良い状態のもの**がなかったと考えられます。

明治 26 年 8 月 6 日

「夕方、**着物 3、4 枚**を持って本郷の**伊勢屋**に行く。  
4 円 50 銭借りて来る。」

原文「夕刻より着類三つよもちて本郷の伊せ屋がもとにゆく、  
四円五拾銭かり来る」

明治 27 年 2 月 2 日

「**着物は全部**質に入れてあるので、  
一寸した外出のためのものもない。」

原文「きるへきもの、塵ほとも残らず、よそ蔵にあつたれば、  
仮そめに出んとするものもなし」

現文京区丸山福山町に住んでいた時

季節に合った**着物以外のほとんど**は伊勢屋質店に預けていたことが分かります。つまり、一葉たち家族にとって夏の暑さや冬の寒さに耐えるための**着物を揃えることは難しかった**と言えるでしょう。

明治 28 年 5 月 17 日

「時は今まさに**初夏**。  
**夏物**に衣がえもしなければならぬが、  
**ゆかた**など殆どは**伊勢屋**に入っている。」

原文「時ハ今まさに初夏也、衣かへもなさてハかなはず、  
ゆかたなど大方いせやか蔵にあり、…」

明治 29 年 6 月 2 日

「**家の方はますます貧乏が逼迫**※して、どうにも仕方がないので、  
**綿入れや裕物などはすべて伊勢屋**に持って行って、**僅かに夏物**  
**一、二枚の仕立て代**だけの収入…」

原文「家は中々に貧迫り来てやる方のなければ、  
綿の入りたるもの裕などはミナから伊せやかもとにやりて、  
からく一二枚の夏物したて出るほとなれとも、…」

参考文献  
・跡見学園女子大学、「旧伊勢屋質店(菊坂跡見堂)」跡見学園女子大学 HP (2024 年 10 月 22 日取得、<https://www.atomi.ac.jp/univ/about/campus/iseya/>)  
・伊藤氏書・施地克宣編、2022、「樋口一葉詳細年表」船橋社。  
・伊藤氏書、2022、「樋口一葉赤書日記」中央公論新社。  
・週刊朝日編、1988、「舊歴年表：明治・大正・昭和」朝日新聞社。  
・樋口一葉・高橋和彦訳、1993、「樋口一葉日記：完全現代語訳」アドレー。

※逼迫…経済的な面で余裕のない状態のこと。